



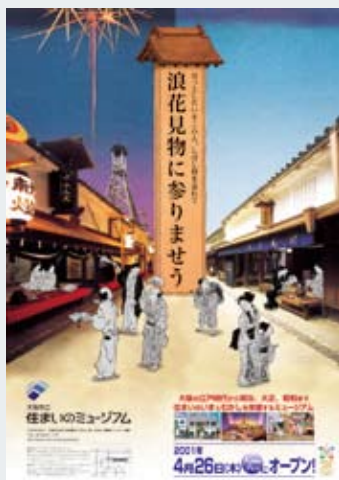
大阪くらしの今昔館 (大阪市立住まいのミュージアム) のあゆみ

- 1992年 「大阪市住宅審議会」で情報提供と展示機能を備えた「(仮称) 住まい・まちづくりセンター」構想の答申。
- 1993年 実物大の町並み再現展示をもつミュージアム構想。
- 1994年 展示設計
- 1995年 阪神淡路大震災。9階展示場・8階企画展示室の特別展示ケース及び特別収蔵庫に免震装置を導入。
- 1999年 「大阪市立住まい情報センター」開設
- 2001年 「大阪市立住まいのミュージアム」開館
ボランティア「町家衆」が活動開始(初年度の登録は42人)
- 2002年 「大阪くらしの今昔館」を愛称として決定
開館1周年記念展「モダン都市大阪—近代の中之島・船場」
第1回ミュージアム協議会開催(会長:石毛直道民博館長)
- 2005年 大阪市立大学都市問題研究のグループ回想法を館内で実施
町家衆の企画による「ディスカバリー天満」展を開催
- 2006年 第1回子ども落語大会。入賞者は天満・天神繁昌亭に出演
都市住宅学会賞業績賞受賞
- 2007年 日本建築協会賞特別賞受賞
- 2008年 日本建築学会賞(業績)受賞。入館者数100万人を達成
キャラクター「ひのみちゃん」「くらじろう」を決定
- 2010年 入館者数150万人を達成
- 2011年 開館10周年記念展「なにわの遊・楽—芝居・祭り・花暦—」
第1回HOPE展「住吉・平野郷・田辺—歴史のまちなみ」
開館10年記念企画「大つくりもの—浦島太郎と龍宮城」
開館10年記念講演会の開催

浪花見物に参りませう

大阪くらしの今昔館（大阪市立住まいのミュージアム）のキャッチコピーは、「ほっとしたいその人、しばし時を忘れて、浪花見物に参りませう」である。今昔館のメイン展示は、ビルの九階に実物大で再現された江戸時代の「大坂町三丁目」の町並みである。ここを歩くと、子どものころの記憶がよみがえって、心が和んだという来館者も多い。彼らは江戸時代の大阪を知っているわけではないが、ここには大阪の原風景がもつ空間の力がある。それを体感できる展示にこだわってきたのが、大阪くらしの今昔館の一〇年である。

今昔館の町並みは、学術的な復元設計をもとに、桂離宮の昭和大修理を担当した数寄屋棟梁が新築した。しかも、博物館によくある書割ではなく、実際の建物と同じ工法で造った。こうして、江戸時代の建築技術による「ほんまもん」の町家ができた。



開館記念 (2001)



開館10年記念 (2011)

つぎに、生活感をだすため、一軒一軒の町家に時代色をつけた。これは映画の美術監督の仕事で、エイジングの手法が取り入れられた。柱や格子の風食、白壁のひび割れ、屋根瓦の傷み、軒先のゆがみ、雨落など、年月を経た町家の風格が再現できた。

さらに、音と光と映像による最先端技術を用いて、一日の移り変わりを演出する大がかりなシステムをつくった。夜が明けると商いの声で町の一日が始まり、昼下がりには金魚売りがやってくる。そのうち辺りが暗くなると雷鳴がとどろき、はげしい雨音が聞こえる（屋内なので雨が降ることはない）。夕立が上ると、町並みは美しい夕焼けに染まる。やがて夜空に月が輝き、星空に流れ星が走り、犬の遠吠えとともに夜は更けてゆく。

大坂町三丁目は架空の町であるが、ここに居るだけで、江戸時代の大阪の町の空気を肌で感じることができる。そして、人間国宝の桂米朝さんが解説する風呂屋シアターの映画を見ると、町人のくらしの知恵が伝わってくる。



町のにぎわい

博物館の展示といえ、古いものが並び、難しい解説が並んでいる、という印象がある。学術的に再現されている今昔館も、堅苦しい展示ではないかと思われるかもしれない。しかし、ここにはテーマパークの楽しさをふんだんに取り入れ、いつ訪れても季節にあわせた催しがある。正月飾り、節分の豆まき、雛人形、月見の飾り、誓文払い（江戸時代の大売り出し）、そして年末の餅つき。年中行事の圧巻は天神祭の宵宮飾りである。江戸時代の大阪では、祭りになると町家の表に幔幕を張り、提灯をかけ、店の間や座敷に金銀の屏風をたて、造り物を飾る風習があった。造り物とは、店の品物や生活道具を使って、何かの形を模してつくった飾り物である。今昔館では、「嫁入り道具一式の獅子」「化粧道具一式の鶏」などを再現している。そのユーモラスな造形は、江戸時代の大阪町人の遊び心を伝えてくれる。



そして、夜空に花火が上がり、祭り気分は最高潮に達する。

町家で行われた華やかな行事は婚礼である。二〇一〇年の秋に今昔館開館一〇周年イベントとして行われた「いとほんのお嫁入り」では、旧家に伝わった打掛を着用して、大阪の婚礼を古式ゆかしく再現した。また、町家の座敷では、月に一度、お茶会があり、子どもや外国からの観光客でも気軽に日本の伝統文化に触れることができる。さらに、上方舞や能の上演、落語の寄席の会場にもなり、毎年秋には「子ども落語大会」が開かれる。今昔館の入賞者から上方落語をになう人材が生まれてほしいと夢はふくらんでくる。

今から一六〇年前、大阪の書肆で歌舞伎狂言作者でもあった西澤一鳳は、大阪の気風について、「花やかに、陽気なることを好み」（『皇都午睡』）と書き残した。大阪くらしの今昔館は、まさに陽気な大阪人が育て上げた、大阪ならではの博物館である。





空堀通



城北バス住宅



古市中団地

モダン都市大阪

今昔館の八階には、近代の大阪をめぐる展示「モダン大阪パノラマ遊覧」がある。巨大な「大阪市パノラマ地図」の光床（フロアパネル）の周りに、西洋館が建ち並ぶ「川口居留地」、近代化が進む「北船場」、モダンな長屋の「大大阪新開地」など、六景の精密な住宅地の模型があり、マニアの間ではちよつと名が知られている。

ここにはもうひとつ「住まい劇場」ある家族の住み替え物語」という隠された展示がある。隠された展示というのは、住まい劇場が一時間に二回しか上演されないからである。上演時間になると「空堀通」、「城北バス住宅」、「古市中団地」の模型が展示ケースの下に沈みこみ、天井から住まい劇場が降りてくる。この上下に動く模型の意外性が受けて固定ファンも多い。しかし、何しろ一時間に二回しかないのだから、この展示をまつたく知らないまま展示場を後にするお客さんが多いのは残念

である。

物語は空堀通から始まる。ここは路地と長屋の町で、織田作之助の小説『わが町』もこの近くが舞台である。昭和五年（一九三〇）、四軒長屋の一つにある理髪店「浪花軒」の出来事。客と主人は、御堂筋の拡幅、地下鉄工事、大阪城天守閣の復興など、世間話で盛り上がっている。この浪花軒の六歳の娘が、主人公の悦子である。

つぎの場面はバス住宅。空襲で焼け出された人々を救済するため、廃車になった木炭バスを利用した仮設の市営住宅である。昭和二三年、ようやくバス住宅に入居した一家に、悦子さんの恋人が訪ねてきたからさあ大変。大事な客を迎えるために、一家は大騒動！

最後は、水洗トイレやバルコニーがある、市民あこがれの古市中団地。昭和三四年、抽選に当たってやっとのことで入居できた悦子さん一家に、初めてテレビが来た日のお話。

悦子さんの声は、大阪出身の八千草薫さんが担当しており、その上品な大阪言葉も隠れた人気になっている。

企画展大行進

大阪くらしの今昔館では、年に五回の企画展を開催している。今昔館は小さな博物館なので一回あたりの展覧会経費は知れている。借用資料の運搬費も毎回は出ない。年に一冊は図録も作りたいが、その費用をねん出するのが大変。こうした予算に縛られたなかで、学芸員の奮闘が続いている。

今昔館の正式名称は、大阪市立住まいのミュージアムである。大阪市立ではあるが、他の市立博物館とは異なり、都市整備局という建築関係の部局が建設した。類似の施設がないので、住まいや建築にかかわる展覧会では、関西の中心になっている。開館一周年記念展の「モダン都市大阪―近代の中之島・船場―からはじまり、「茶室起こし絵図展」、「大阪近代住宅ものがたり」、「住まいの絵本展」、「文化遺産としてのモダンイズム建築」、「世界遺産をつくった

大工棟梁―中井大和守の仕事」、「明治・大正お屋敷ドローイング（彩色図）」、「聴竹居と藤井厚二展」、そして二〇一一年の「竹原義二／原図展―素の建築」と毎年開催されている。ユニークな展覧会は、二〇〇七年の「おまけ大行進」展。お菓子や飲料品についているおまけや、コンビニなどで売っているフィギュアを、大阪のメーカーを中心に一万点近くも展示した。また、入館者が多かった企画展は、二〇一一年の冬に開かれた「昭和レトロ家電」展。白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫の「三種の神器」をはじめ、様々な家庭電化製品が誕生した昭和三〇年代の展示である。当時の家電は豊かさの象徴であり、庶民のあこがれの的であった。シンプルで丸みをおびたレトロなデザインは、どこか懐かしく可愛らしいことから、来館者の話題になった。予算が少なくても、素材や切り口で勝負する。やせ我慢に聞こえるかも知れないが、ユニークな企画が、今昔館の生きる道であらう。



「昭和レトロ家電」



「竹原義二／原図展―素の建築」

恐るべし！ 町家衆

近ごろはボランティアが大はやりであるが、今昔館にも町家衆と名乗るボランティアが来館者を待ち受けている。しかしその活動内容は、他の博物館とはかなり異なっている。町家衆は、「自分が楽しいことをやるう」を合言葉に、江戸時代の町並みの案内はもちろんのこと、南京玉すだれ、けん玉の実演、おじゃみ（お手玉）づくり、和服の着付けなど、心をこめたもてなしをしてくれる。

和服に着替えた来館者も、この町の住人になりきってコマ回しや折り紙に興じる。見るだけではなく、みんなが楽しむことで、自然に町の賑わいが生まれている。



と売り歩く唐辛子売り。葉屋の前裁では、「宝引」と呼ばれる福引き。一〇本ほどの綱を束ねて参加者に引かせ、橙の実がついた綱を引いた者が大当たりで、賞品がもらえる。

路地の奥の裏長屋は、一戸一戸が屋台の小屋に見立てられ、「からくり」的や「見世物小屋」になる。からくり的は、矢が的にあたると、上からお化けや人形が落ちてくる仕掛けで、大人も子どもも夢中になる。見世物小屋では、「六尺の大イタチ」や「天竺の白くじやく」を見せるが、いずれも落ちがあり、大笑いとなる。

行列のできる「のぞきからくり」は、「勧善懲悪今生の戒」地獄極楽。現世に悪行をなした者が、死後に地獄に落ちるが、阿弥陀如来の慈悲で救われるというお話。焦熱地獄、極寒地獄、賽の河原など。レインズを覗くと巧みな口上とともに地獄絵が次々に変わる。「のぞきからくり」は、屋台の製作から実演まで、すべて町家衆の手作り。「恐るべし！ 町家衆」である。



大阪くらしの今昔館（大阪市立住まいのミュージアム）は、二〇〇一年四月に開館し、今年の四月で二〇周年を迎えました。

今昔館の企画は、一九九一年の大阪市住宅審議会による「大阪の都市住宅の歴史を知ることができる展示機能」をもつ住まい情報センター構想にさかのぼります。九三年には、実物大の町並み展示をもつミュージアムが計画され、九九年の大阪市立住まい情報センター開設に次いで、二年後に住まいのミュージアムが開館し、翌年には大阪くらしの今昔館という愛称が付けられました。

現在、日本の博物館は五七〇〇に達しています。そのうち動物園や水族館は人気スポットになっていますが、全体の六割を占める歴史博物館は人気が低く、一度見学したらおしまいという館も少なくありません。そこで、今昔館では、知的で遊び心がある「アミュージアム」（アミュージメント+ミュージアム）を目指しました。

開館以来の入館者数は、毎年一五万人前後を数え、二〇〇八年一月に一〇〇万人、二〇一〇年一月には一五〇万人目を迎えました。これだけ多くの市民に親しまれるようになったのは、その活動内容にあると考えています。リピーターを確保するために、常設展の経営に力を入れました。実物大に再現された町家では、さまざまな年中行事や上方芸能を催し、大阪で育まれた生活文化を体感できるようにしました。企画展もこの一〇年間

で五〇本以上を実施し、住まいや建築にかかわる展覧会では、関西の中心になっています。

きめの細かい住まい学習も今昔館の魅力になっています。「むかしのくらし」の授業には、毎年二万人近い小学生が参加しています。高齢者には、認知症の予防に効果があるとされるグループ回想法の研修活動を、大学や病院と連携して行っています。また、ボランティアである「町家衆」の活動も盛んで、まちづくりの手法を取り入れた多彩なメニューで来館者をもてなしています。

この間、今昔館の活動は、二〇〇六年に都市住宅学会賞業績賞、二〇〇七年に日本建築協会賞特別賞、そして二〇〇八年に日本建築学会賞（業績）を受賞し、外部からも高い評価を得ています。

大阪くらしの今昔館は、一〇年の活動をふまえ、ミュージアム・マネージメントにさらに磨きをかけ、二一世紀における歴史博物館のあり方に新風を吹き込みたいと考えています。これまで今昔館の企画と活動にご尽力を頂いた多くの方々に改めて感謝を申し上げますとともに、これからも、ご指導、ご協力を賜りますよう、心からお願ひ申し上げます。

二〇一一年一月

住まいのミュージアム大阪くらしの今昔館 館長

谷 直樹

開館一〇年記念誌
「大阪くらしの今昔館」ものがたり

平成二十三年（二〇一一）一月 発行

〒五三〇〇〇四一

大阪市北区天神橋六丁目四十二〇

TEL 〇六六二四二二一七〇

写真 真 京極 寛
デザイン 堀内仁美



開館一〇年記念誌

「大阪くらしの今昔館」ものがたり

